

昼寝刻

山田真砂年

昼顔の停電したる色をして
富士の水たらふく飲んで涼みをり
電柱に犬の染みある日の盛
ワルナスビとて可愛らし日の盛
釣り銭を待つ間も扇子使ひをる
嘘つける淋しさに水打ちにけり
万緑や嘘のほころび始めたる
凌霄の嘘重ねたる色をして
葉のゆれて毛蟲もゆれてをりにけり
大汗の男大盛り注文す
三尺寝眩しき方に背を向けて
一人来て寡黙な刻を半夏生草
虎が雨鋼光りに力石
梅雨どきのスタバに犬を抱いてくる
月見草乙女峠を越ゆるとき
片蔭や虜囚のごとく一列に
身の丈に薄き雲浮く氷室かな
蓮咲いて三尺三寸水の上
ざりざりと皮むき梨は昼の月
金メダル必ず嚙るパリは秋
秋早鬱どぶといふ字を五回書き
東京に溝ありし頃黄のカンナ
誰も彼も口あいてをる残暑かな
稲の花散り深閑と昼寝刻
稲の花赤子眠りて太りゆく